



笹下地区 令和6年度(第1回)地域意見交換会まとめ

開催日時:令和6年6月15日18時～20時

場所:港南中央地域ケアプラザ

1 挨拶

笹下連合町内会・地区社協福祉協議会 荻久保会長
港南区役所 栗原港南区長

2 地区別計画と意見交換会について

港南区社会福祉協議会 小方事務局長
笹下地区の地域福祉計画について、概要版を用いてお話がありました。

港南区計画 **4つのアクション**

「しる」・「つながる」・「できることをやる」・「ささえあう」

笹下の目標 **5つの取り組み**

「いつも、大丈夫～安全・安心・快適なまち～」

「みんな顔見知り～笑顔の見える関係づくり～」

「3世代交流～年の差を超えて～」

「バトンをつなごう～新しい担い手づくり～」

「元気で長生き～みんなで健康づくり～」



3 災害ボランティア活動支援時の体験談

(1) 災害ボランティアセンター活動を通じて 港南区社会福祉協議会 西澤氏

石川県社会福祉協議会からの要請を受けて、3/11-3/17 石川県中能登町で災害ボランティアセンターの運営支援

災害ボランティアセンターの役割説明

- ・ニーズの受付
- ・ボランティアのコーディネート
- ・車や機材等の貸し出し

能登半島地震の現地の被害状況

- ・全壊した古い家屋も一部あったが、ほとんどは倒壊まではしていなかった。
- ・屋根瓦が崩れ、ブルーシートをかけた家もあった。

ボランティアの依頼内容

- ・荷物の運び出し ・割れたガラスや倒れた灯籠やブロック塀の処分
- ・災害ごみの搬出及び片付けが大半
- ・お年寄りからの依頼が多い

ボランティアセンターの開設時期(ボランティアの受け入れ開始)

- ・ある程度体制が整わないと開設できない。(機材とか)
- ・一気に集まると道路が渋滞し、必要物資が届かない。
- ・ボランティアの食事の用意がない。
- ・発災後すぐに受け入れはできない。

現地の様子

- ・見守り世帯の班費確認を行ったが、帰省の時期であり、確認が大変
- ・避難所に入らない独居家庭に物資を届ける。
- ・顔を見せたら安心された。

活動してみたの所感

- ・ボランティア活動は、発災直後から開始できない。
- ・まずは住民同士での助け合いが重要である。
- ・日ごろから近隣とのつながりが大事である。

(2) 災害派遣報告 港南区福祉保健課 生末氏

能登半島地震災害派遣で珠洲市に2月日から2月日の日間能登半島で保健師業務に従事し、現地の様子について説明。

現地の状況

- ・海沿いの地域で津波の被害があった。つぶれた家屋に津波の被害もあった。
- ・高齢化率が51.1%と非常に高い地区
- ・1階が倒壊し、2階が1階部分を押しつぶしている状況
- ・道路もかなり破損していた
- ・公的な避難所は18か所あったが、個人所有のビニールハウスや廃園になった建物に自主避難されていた方々は、把握されたのは1か月経過したころ。
- ・断水が続いており、トイレが非常に困った。

避難所の様子

- ・発災直後は段ボールベッドもなく、家から持ち出したものの周りにいる状況
- ・数日経過し、段ボールベッドが設置されると区画がなんとなく整理された。
- ・昼間は乳幼児と母親、高齢者とボランティアのみ
- ・段差が多く高齢者が一人で動くのも難しく、周囲の人の助けが必要であった。

巡回訪問

<ケース1：独居高齢者>

- ・難聴のため、訪問に気づいてもらえない。近所の方が、水を運んでいたことで、生活をぎりぎり送っていた。様々な情報が届いていなかった。

<ケース2：被災時の孤立>

- ・電柱が家屋に倒れ掛かっていたが、知り合いが声をかけると出てきてくれたが、新たな環境に慣れないため、孤立していた。

課題

- ・災害はすべて申請主義であるため、手続きできない人が取り残される。
 - ・被災し生活が変化し、自立していた人も支援が必要な状況も
 - ・乳幼児と高齢者が避難所に残り残されるため、体も弱ってしまう。
 - ・母子もイライラなど精神的に不安定になることも。
 - ・行政はすべてを把握できないので、取り残される人が出てくる。
- 3日の食料準備をと言っているが、3日だけで足りるのか…疑問が残る

活動してみたの所感

日ごろから顔が見える関係とお互い様の思いやりが大切！

3 座談会

今回は災害時の対応単位として地域防災拠点単位で話し合った

(1) 港南中・相武山小 進行：畠山会長 板書：生末、記録：櫻井

- ・災害弱者をどのように把握するかが大切（個人情報扱いもあるが。）
- ・集落などでは、だれが助けるか分担もしっかりしていると聞く。都会でもいざというときに備えて決めておくことも必要。
- ・シルバークラブでは、友愛活動として独り暮らしや高齢者の見守りを行っている。電気つけっぱなしやポストなどに注意し、声がけを行っている。この関係は有事の時にも生きると思う。



- ・民生とシルバー両輪での取り組みになっていると思う。
- ・体験談で参考になった。また災害ボランティアセンターについては、言葉としてははしっていたが、仕組みが理解できた。
- ・自分も派遣に携わった。診療補助と福祉避難所に携わり、介助や生活のサポート全面としてのボランティアだった。地域のつながりという話があったが、避難所運営に公助としての缶詰など物資は届くが、野菜が不足するなどきめ細かな部分は、地域の持ち寄りや差し入れ、公助では行き届かない部分がある。また、水汲みがすごく大変だった。笹下のように3世代交流などにより、世代間の支え合いやつながりが有事に生きる。
- ・現実的な水の確保として、地域では井戸による確保が話題にあがったことがある。
- ・阪神淡路のときを思い出すと、地域によって想定される地震の種類もちがうと思うのと、地域によっては黄色いタオルやハンカチによる安全確認に取り組んでいる話を聞いたことがあり、効率的でよい取組だと思った。
- ・能登半島地震から半年がたち、被災地以外では意識が希薄になった気がする。今回の場を機にあらためて希薄化させないようにしたいと思った。うちの町会では、防犯パトロールの際にそのことに触れて呼びかけすることで、希薄化しないように、支援の取組が継続するように工夫している。
- ・シルバーでは備蓄の講話を今度消防にやってもらう。そのほか町会では図上訓練を取り入れたいとおもっている。地域の特徴をして対応することが大切。
- ・町会で訓練やっても人数があつまらないこともある。いかに新しい人(戸建て)と交流を持つか。
- ・敬老対象の調査のとき、安否確認の意向をあわせて聞いてみるのもいいのではないか。
- ・ボランティアにもいろいろある。自分にできることを考えて、小さなことでもできることをすることが大切だと思った。
- ・隣近所の人を知る、つながるのが大切だと思った。その過程の家族構成すら知らないお宅もある。また、訓練など出てこれない人もいるので、そこをどうするかが大切。
- ・建築基準法改正前の耐震が弱い建物への対策も必要(瓦⇒スレート、耐震補強)
- ・向こう三軒両隣くらい地域でつながりが必要。うちでは老人会でラジオ体操に取り組んでいる。これがゆるやかな見守り、つながりになっている。また世代間の交流も必要だと感じた。

区長コメント

- ・人口の集積は1/20。距離が遠い、都市ではもっと近い距離で起きる。
- ・たくさん亡くなるかもしれないが、たくさんの方が周りにいる状況。
- ・日頃からつながりを大切にしていくことが大切だとして、笹下地区では取り組み、今回のテーマにもあるが、いざというときには生きてくると思うし意義があると思う。

(2) 南台小 進行:武川会長 板書:荒谷、記録:山口

- ・すぐに来られないことは知っていた。班ごとに世帯を把握したい。プライバシーもあり難しい部分もある。回覧板を渡すときにコミュニケーションをとれると良い。
- ・ボランティアの立ち上がりが遅い。都会ではなんでもすぐできると思っているが、災害時は機能しないかもしれない。小さい単位で回覧板などを回す単位とかで。
- ・能登半島は特殊な事情だったように思う。地震があつて意識が高いときに訓練した。
- ・笹下ネットワークボランティアを行っている。対応してきた中で、町内会の地図に高齢者が住んでいるところを落としている。安否確認の一助としている。



- ・(生末)行政が行き届かない。自ら備えなければならない。若い人が自治会に入らない。自治会も防災の一助になっている。
- ・東日本大震災で震災から半年後に応援で現地に行ったが、まだ罹災証明などの申請は続いており、手続きだけでもかなりの時間を要する。また、国の方針として「誰ひとり見逃さない」というものがあるが、行政だけでは不可能。地元の情報がなければ、実現できないと感じている。
- ・水が出なかった状況があり、団地から水をもらっていたことがある。東北の震災後に、ひまわり交流で東北のこどもたちが横浜に来た際にも水の大事さを学んだ。
- ・生の話を聞くことができ、びっくりした。想像以上のことがあることを知った。自分ができることをもう少し考えていきたい。草刈りを全員でやっていたが、業者に任せることが多く、コミュニケーションが減った。水が出ないだけでも大変だった。団地では階段の日を設けて、その階段を利用する人との交流する機会がある。
- ・団地は1団地ごとに役員がついている。どのような家族構成でいるのか、アンテナ高くしておきたい。埋設水道管が破裂し、断水した。若い人は出勤し連絡が取れないことが課題で、LINE等での連絡手段を検討している。曜日や時間帯によって動きが変わってしまう。
- ・町内会単位の方が動きやすい。ボランティアセンター 動けるのか心配になった。振り分けが非常に大変。現実には動き出せるのは落ち着いてから。在宅避難 防災拠点での受け入れは最大で195名。各町内会で頑張ってもらいたい。個人情報を取りに行っても協力してもらえないケースも。一方通行だと難しい。双方通行になるように。情報誌は読まない。情報が伝わるようで伝わらない。
- ・障害があり声を上げられない人がいて、民生委員とつながりたいとの要望があった。つなげられた。
- ・自分たちの町内会で安否確認の難しさ。高齢者の把握をどうしていくか。5, 6軒先の状況はわからない。3月に安否確認場所で確認訓練を行った。そこにも来られない人の把握をどうするか。

<全体への質問>

各町内会で備蓄しているか？水の備蓄など

➡ある程度あるが、自分でトイレと水は3日分は備蓄するよう伝えている。学校の備蓄も大勢来たら1日でなくなってしまう。在宅の人にも配布される。トイレパックの備蓄(100人で3日 5,000パック)

(3) 笹下中 進行:柿沼会長 板書:西澤、記録:深野

・笹下中は災害があった時に行政に頼るのではなく、自分達でやることを目標としている

・町会として共助というが具体的に何を誰がするか難しい。災害があったらみんな被災者になるので、誰が拠点を開くのか？決まってない。

・災害があったら拠点である中学校に集まることになっているが、地震だけなら自宅避難の推奨がされている。拠点到避難してない方が自宅避難なのか、身体的に来られないのか見極めができない。自宅避難で家に安否確認の顔カードがあっても外に付けられないかもしれない。

→わかるシステムがあると良い

笹下中学校区では民生に役割はあるため、民生委員を使って欲しい。

拠点である学校が開くということから、中学生にも拠点の動きを覚えて欲しいので訓練への参加をして欲しい。役割はあるが、誰もが被災者になりできない可能性もあるので日頃からの近隣とゆるやかな繋がり、できる方ができることをやる方がよいのでは？役割を持っている方は数名いて役割の状況共有をすることで誰でも対応可能にしているが、役割を持っていない方も拠点の知識を持っていると良い。



中の丸上ではゴミ収集場はいつとき避難場所となっている。収集ボックスにはその地域の方(町会加入者・未加入者)の名前が書いたリストがあり安否の確認すべき人がわかりやすくしている
家には安否確認カードがある、自宅での避難でもわかるようにしている。家が潰れた場合は安否確認をする→きにかけることが大切=共助の基本

中学生の笹下のイメージは行事が多いく、楽しいとあるコメントがある・・・ラジオ体操やお祭りなど。行事は楽しむだけではなく、顔の見える関係にもなる。また住んでいるところもわかる。

中学生は拠点を立ち上げてから体力的にも有力になるので訓練に出てきてもらう仕組みが大切。各町会との繋がりを大切にしていけるように取り組んでいくことが大事